

「植物病理を紡ぐ会」世話人一同

「第9回 植物病理を紡ぐ会」開催のお知らせ

日本植物病理学会大会にあわせ、若手および中堅研究者有志による自主勉強会「植物病理を紡ぐ会」を開催します。本会は、各地域部会で実施されてきた「若手の会」の趣旨を全国大会の場にも広げ、学生や若手会員が交流・情報交換できる場として発展してきました。本会では、①植物病理学が対象とする幅広い研究領域への理解を深めること、②植物病理学を通じて広がる多様なキャリアパスを知ることを主な目的としています。また、年齢制限を設けないことで、分野・業種・世代を超えた交流と議論の場を提供し、参加者が多様な視点から植物病理学を考える機会となることを目指しております。今回は特別ゲストとして、岡山大学の鈴木信弘教授をお迎えいたします。講演後には、樟葉駅周辺にて懇親会も予定しております。学生・若手研究者をはじめ、本会の趣旨にご賛同いただける皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日時：令和8年3月28日（土）15:00～17:50

会場：摂南大学 枚方キャンパス 8号館 8306教室

詳細告知用WEBサイト：<https://www.knt.co.jp/ec/2026/ppsj/kanren.html>

参加登録フォーム：<https://forms.gle/5fSiYWTmkgFgthRA7>

プログラム（敬称略）

15:00～15:05 開会挨拶

15:05～15:35 後藤 幸久（チューリッヒ大学）

「為せば成る、為さねば成らぬ何事も～スイスで紡ぐ植物免疫受容体研究～」

15:35～16:05 今野 沙弥香（カゴメ株式会社）

「フィールドから始まる病害研究への挑戦」

16:05～16:20 休憩

16:20～16:50 岡野 夕香里（福島大学）

「迷いながら進んできた研究と教育の話」

16:50～17:30 【特別講演】鈴木 信弘（岡山大学 資源植物科学研究所）

「ウイルスに魅せられて～ネオウイルス学の黎明～」

17:30～17:50 閉会（参加者記念撮影）

19:30～ 懇親会 *樟葉駅周辺を予定

＜懇親会について＞ お店の予約の都合上、2026年2月20日（金）までに「参加登録フォーム」よりご登録をお願いいたします。

＜参加申し込み＞ 講演への参加登録は、2026年3月6日（金）までに「参加登録フォーム」よりご登録をお願いいたします。

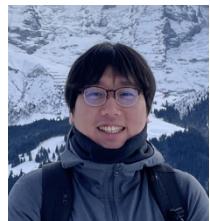
＜世話人＞ 安達広明（北海道大学）、鮎川侑（愛媛大学）、鵜家綾香（国際農研）、坂田七海（岡山大学）、深田史美（岡山大）（五十音順）

＜お問い合わせ＞ 安達広明 Email : hadachi あ sci.hokudai.ac.jp（”あ”を@に変換してご利用下さい）

[講演要旨]

「為せば成る、為さねば成らぬ何事も～スイスで紡ぐ植物免疫受容体研究～」

後藤 幸久（チューリッヒ大学）



動植物は外界の変化を感じ取るため、細胞表層にセンサーとして受容体を張り巡らせています。近年の研究により、植物－微生物、植物－植物、植物－昆虫などの相互作用に関わる多数の植物免疫受容体が同定されてきました。しかしその一方で、毎年新たな免疫誘導物質が報告され続けており、それらを認識する未同定の免疫受容体が数多く存在することも確かな事実です。私はこのような細胞表層の植物免疫受容体に強い関心を持ち、学位取得後、スイス・チューリッヒ大学にて博士研究員（ポスドク）として、新規免疫受容体の同定に関わる研究を始めました。海外で研究仲間の輪を広げ、現在も試行錯誤を重ねながら歩んでいる私の海外研究体験をご紹介することで、今後、海外を目指す次世代の方々にとって、少しでも参考になれば幸いです。

「フィールドから始まる病害研究への挑戦」

今野 沙弥香（カゴメ株式会社）



私は、大学の講義で初めて植物病理学という学問を知りました。作物と微生物の間に存在する複雑な相互作用に興味を持ち、もっと知りたいという気持ちから博士課程に進みました。博士課程では、ベンサミアナタバコのジャガイモ疫病菌に対する抵抗性のしくみを研究し、ベンサミアナの未知の抵抗性機構の一端を知ることが出来ました。現在は民間企業で、トマトの病害抵抗性品種の開発や病害診断に取り組んでいます。大学と企業では、研究への取り組み方や成果の求められ方に大きな違いがあると感じています。一方で、大学時代に培った経験や人とのつながりは、今の自分にとって大切な支えとなっています。本講演では、大学での研究と企業での研究の違い、そして企業で働く上で重要だと考える視点について、私自身の経験を踏まえてお話しします。

「迷いながら進んできた研究と教育の話」

岡野 夕香里（福島大学）



大学の講義で植物のお医者さんがいると知り、植物病理学の世界に飛び込みました。それ以来、植物ウイルスに対するRNAサイレンシングのテーマを中心に、ウイルス関連の幅広いテーマに取り組みました。また、植物医学の分野に触れ、診断を通して多くの病原体を扱いました。現在は大学で学生に植物病理学を教える立場となり、この分野の面白さを再認識しています。

研究や教育に携わる中で、思い通りに進まないことや迷いを感じる場面は少なくありません。本発表では、これまで研究および教育に関わる中で経験してきた試行錯誤や迷いとその対策について紹介します。特に、福島大学に新しく設置された農学部で研究室を立ち上げた際の経験を紹介したいと思います。本発表が、研究や将来に不安や迷いを感じている学生・若手研究者にとって、考えるきっかけや気持ちを整理する一助となれば幸いです。

「ウイルスに魅せられて～ネオウイルス学の黎明～」

鈴木 信弘（岡山大学 資源植物科学研究所）

筆者は、メリーランド州立大学生物工研究所に留学した1997年以降、そして2001年に岡山大学資源生物科学研究所（現在の資源植物科学研究所）に着任した以降現在に至るまで主に菌類ウイルス学の研究を進めてきた。この間、倉敷の地で多様なウイルスと出会い、また世界各国の色々な個性豊かな学生、研究者の方々との共同研究に携わってきている。



本会では、そのような研究者としての経験、醍醐味に触れながら、筆者の菌類ウイルス学の研究（無節操と思えるウイルスの探索）を振り返って見たい。研究内容としては主に、1) これでもウイルスと呼べるのかと思えるような新しいライフスタイル（宿主性・宿借性、裸性）をもつウイルスの発見、2) マイコイミュニティ（抗ウイルス防御機構）の解析、について紹介したい。1) については、最近見つかったヤドヌシ様／ヤドカリ様ウイルス間のパートナーシップの多様性を中心に紹介する。本セミナーを通じて、研究材料としての（菌類）ウイルスの魅力、ウイルス研究の魅力を伝えることができたら幸甚である。